がんと向き合う日々は続くが・・・　　中上　芳子

がんと告知された時、頭の中が真っ白になるとか、そういう衝撃はなかったように思う。自分自身を何とか納得させようと努めていたのかも知れない。先生の言葉の端々、体の調子等、告知前の約一ヶ月間ある程度心の準備ができていたのかな。家族も冷静に受け止めようという気配りが私にはとてもありがたくうれしかった。

手術日前の心境は不安だった。初めての大手術、漠然とした不安が、能天気でいようとしたが、じっと考えていると不安がとてつもなく大きくなってくる。あまり考えないようにと思っているのだが、先生に任せていれば何とかなる。先生に任せよう、そして手術室へ。手術が終わりぼんやりと意識が戻りはじめた。嫁（娘のように思っている）がいた。じっと待っていてくれたのだと思うと安心したのか又寝てしまった。何分か経ったのだろう家族や、親戚が私を励ましに来てくれていた。もう一度元気になって出会いたい。「よし頑張ろう」と思ってはいるのだが、頭がもうろうとしてその内又寝てしまっていた。朝、ベッドの横に嫁がまだいて「もうダイジョウブやで」と一言、私もうなづいた。時々目を開けると「何も心配せんでよいで、眠たいだけ寝えや」そう言って一日中横に居てくれた。その後も朝、目が覚めると必ず娘が居てくれた。「今日も来てくれたの」と聞くと「心配でどこにもいけへん、顔を見ると安心するので来ているだけやで、はよう元気になってや、手助けはしないけど」とつっけんとした言葉であるが心やさしい嫁です。夜一人ベッドで寝ている時どうしてがんになったのかな？わたしが何でがんなの？どうして厄介な病気に取りつかれたのかな？父方、母方誰もいないのにな？自分ががんに侵されるとは一度も思ったことも、考えたこともなかったのにと色々考えても答はでない。また明日考えよう寝ることにしよう。

抗がん剤の開始、とにかく副作用の覚悟でした。食欲不振、吐き気、頭髪が抜ける、全身の倦怠感、手足のしびれ等不安はあるが前に進むしかない。副作用でよれよれになっている私を、みんなが助けてくれたり励ましてくれたりで立ち直らせてくれた。体調をよく観察してくれて、一日の内何度となく来てくれた先生。真夜中の吐き気を気遣って背中を撫でてくれた看護師さん。副作用を気にしてくれた薬剤師さん。食欲のない私に食事の変更をしてくれた栄養士さん。七夕の日にはそっとお膳に飾りを付けて、ひと時を和ませてくれた炊事場の方。部屋の気配りありがとう師長さん。支援センターの看護師さん、何回来て下さったことやら数えられない温かさに触れた日々。

色んなことがありつつ半年間の抗がん剤治療を終え元気になれた私。私一人ではどうにもならない、周りの人、家族の思いやりであったり、愛であったり、元気づけてくれるみんな。みんながいる。がんとわかってから子供達には苦労と心配をいっぱい、かけたと思う。がんと向き合う日は続くがぼちぼちがんばろうみんな！